想い出の座間
（人々の経済生活編）

座間で写真が一般的になったのは戦後に入ってからです。それ以前は写真に接する機会はごく一部の人に限られており、何かの記念に厚木や横浜などの写真屋へ出かけたり、出張して来てもらって撮影するのが一般的でした。従って人物写真が多く、風景や出来事を撮ったものはごく少ないのですが、可能な限りアルバムの中からひろい出して編集したのが昭和61年(1986）3月に発行された「目で見る座間」です。

この「想い出の座間」は、書籍の「目で見る座間」をホームページに忠実に反映することを基本にしております。

今回は、前回の昭和前期に続き、人々の経済生活を紹介させていただきます。内容は、屋敷がまえ、米ができるまで、麦作、畑地灌漑事業、養蚕、養種製造，野良着姿、他の生業に関する写真とコメントになります。

人々の経済生活

古くから座間の人々は農業を営んできた。ここでは、この農業を中心とする当時の人々の暮らしぶりをアルバムの中から紹介する。

写真はおこじゅう運び　農繁期の農家はそれこそ猫の手も借りたいほど忙しい。おこじゅう(おやつ)運びなど子供の仕事とされたものはたくさんあった。

屋敷がまえ

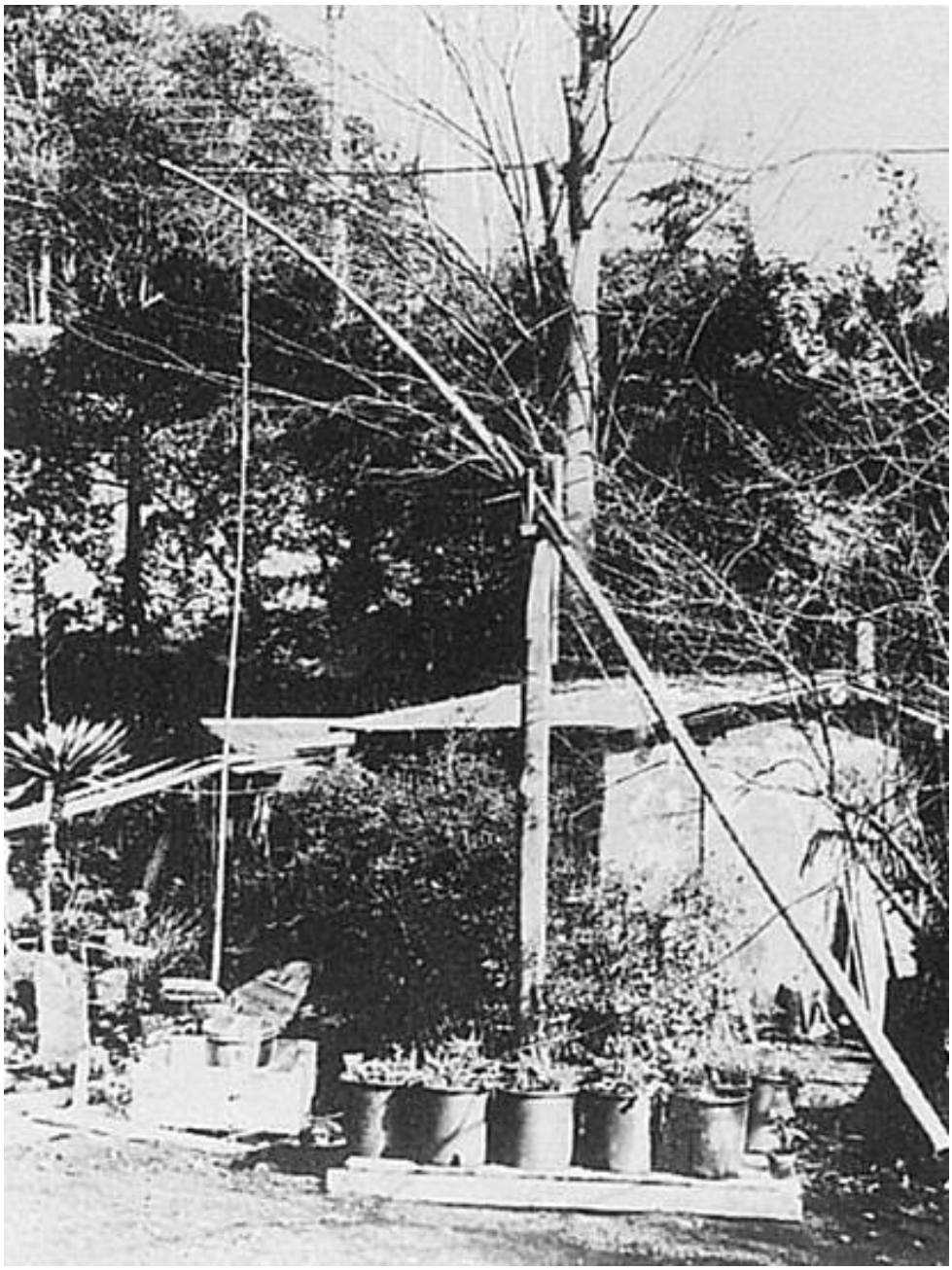
　この辺では、母屋や庭など日常生活に必要な施設のある敷地をヤシキ(屋敷)と呼ぶ。母屋はほとんど東か西向きに建てられ、その前面に広く庭を取り、庭を囲むように物置などの付属建物が建っており、それらの建物は草屋根がほとんどであった。ヤシキの囲りには防風などのため、屋敷林やクネガキ(垣根)を植えている。

草葺屋根

　市内には草葺の家は姿を消してしまった。写真は上栗原。

　農家の庭は苗場を作ったり、稲こきなどの作業場、干場などと一年中を通して利用するので、母屋に近く、広い場所をとり、しかも日当たりの良いことが必要だった。

　写真は入谷の谷戸地区。



ハネツルベ井戸

　浅い井戸はハネツルベ、深い所は車井戸だった。下栗原。

農家の庭先き

　冬であろう。中央に作られているのがサツマグラ(サツマ芋の苗グラ)、野良着が干され、普段の生活の一端がうかがえる。

水田　米ができるまで

　座間の農業は大まかにいって、西部の田場所と呼ばれる水田地帯と東部のオカ場所、ノヤと呼ばれる畑作地帯とに分けられる。

苗ふり　4月の下旬になると苗代作りが行われる。苗代にする田は水の調整に便利で土質が良い所を選び、ていねいに代をかいた。

　ここへ5月の3、4日ごろ苗ふりといって種籾を播く。

代かき

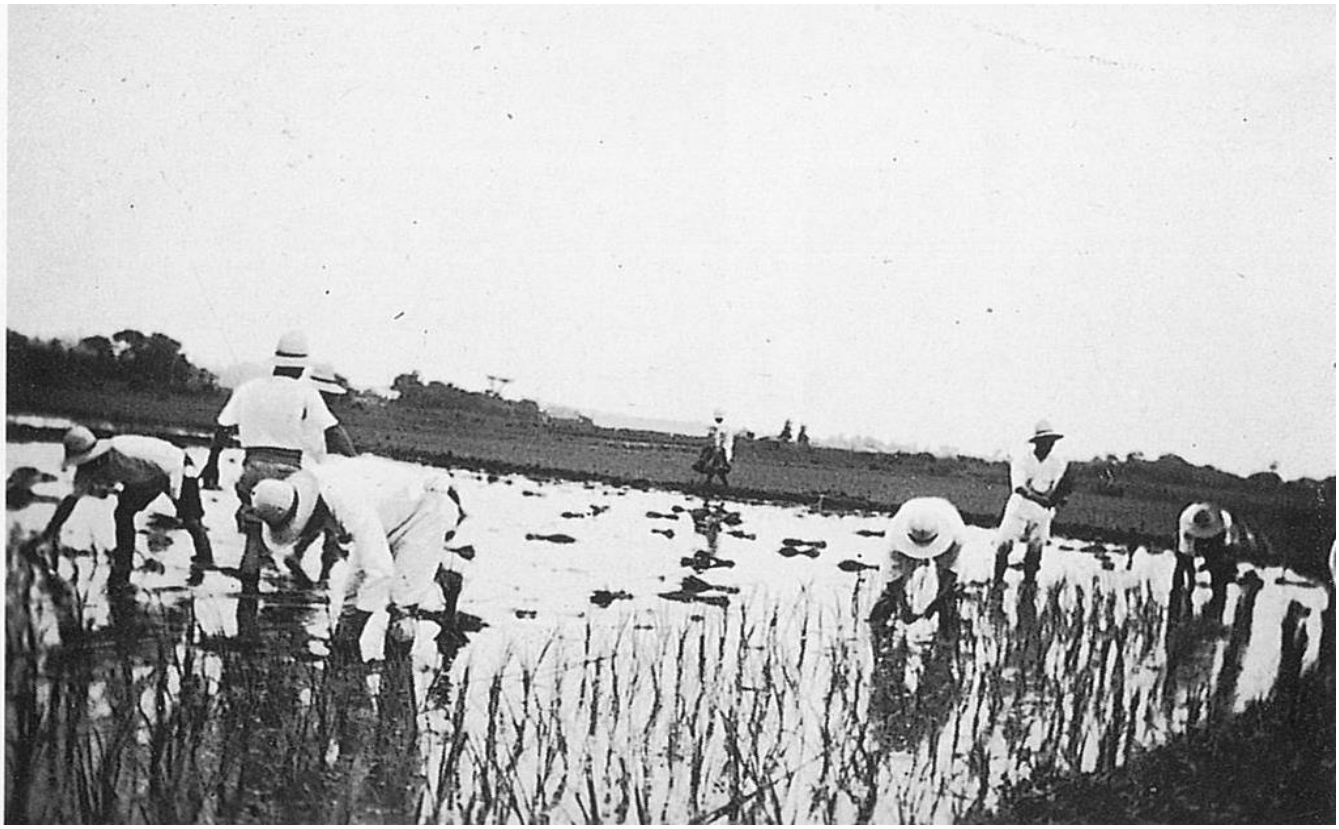
　田は荒起こしといって、クワや万能、牛馬による鋤を使って土を起こしておく。そして田植え前になると田に水を張り、代かき(代きり)といってやはり万能や牛馬などを使って土を細かに砕き、ドロドロにして高低のないように均す。

鼻取り

　牛馬を使って代かきをする場合、牛の鼻輪や馬の口輪に竹の棒を結んで先導するが、この役目はたいてい子供や小娘だった。

苗取り

　この仕事は女性の役目とされた。苗は両手の小指で土を掻き取るようにして、苗を傷めないように抜き取り、ワラで束ねる。



田植え

　座間では田植えのことを一般に植え田と呼び、苗運びを含めてこちらは男子の仕事である。だいたい6月の末から7月の初めにかけて行われる。

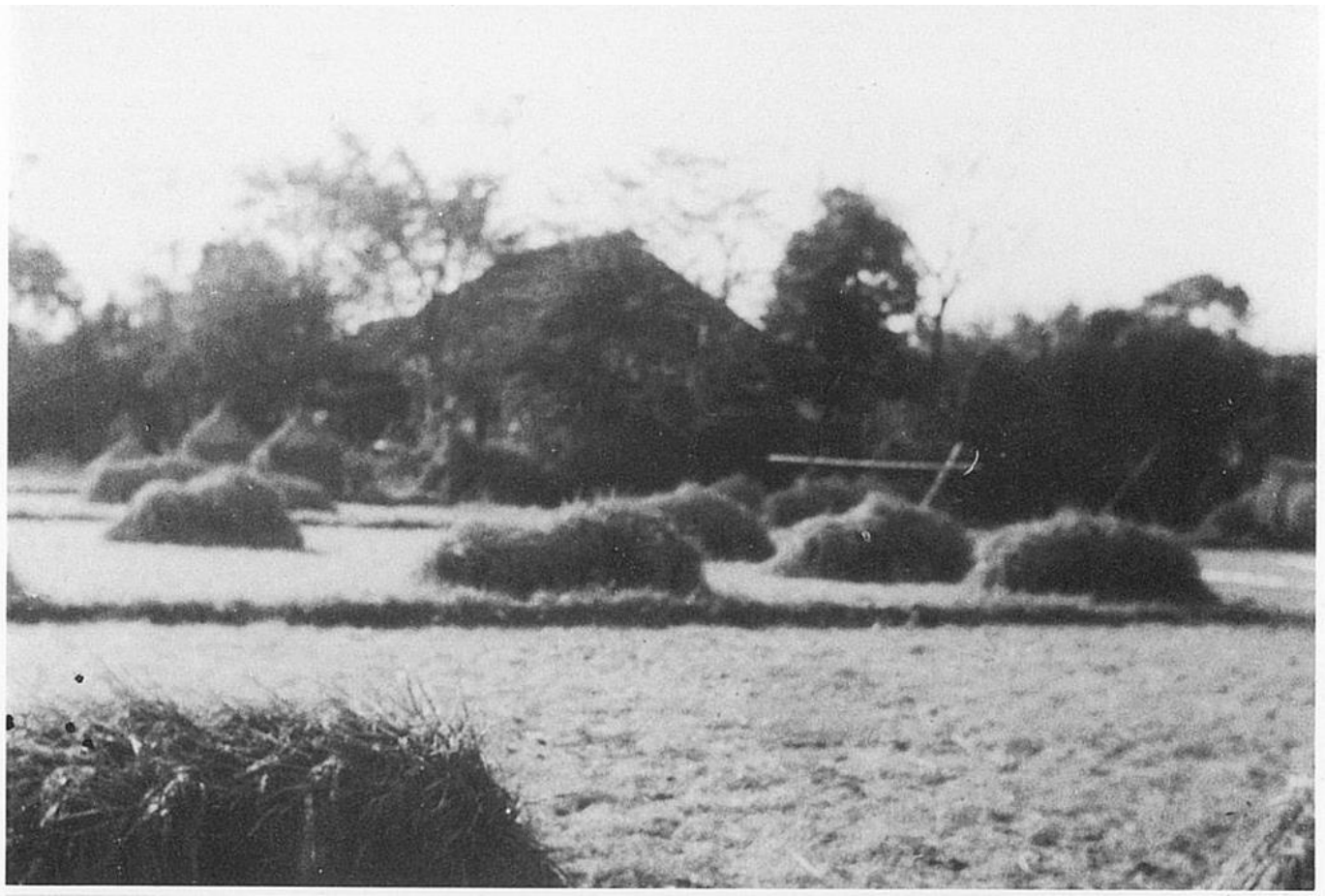
正条植え

　長さ6尺の尺杖と呼ぶ竹の棒で間隔を決め、細い綱を張り、これに沿って6株ずつアトビシャリ(後へ下がる)しながら植えてゆく。

　苗は束をもった手の指先の感覚で分け、右手に取って植える。その後、田まわりといって水の調節や田の草取りなどを行いながら大切に育て上げてゆく。

稲刈り

　稲刈りは10月中旬ごろから始まるが、11月15日の伊勢講までに刈り終わればよい方であった。昭和32年。



稲干し

　この辺では、刈り取った稲は脱穀するまでこのようにして田んぼに置いて、干しておくのが普通だった。昭和35年ごろ。新田宿東裏。

掛け干し

　座間ではめずらしいが、水はけの悪い田んぼでは刈り取った後、稲架を作って稲を掛けて干した。

　昭和30年ごろか、栗原中原。

桜田耕地の稲あげ風景

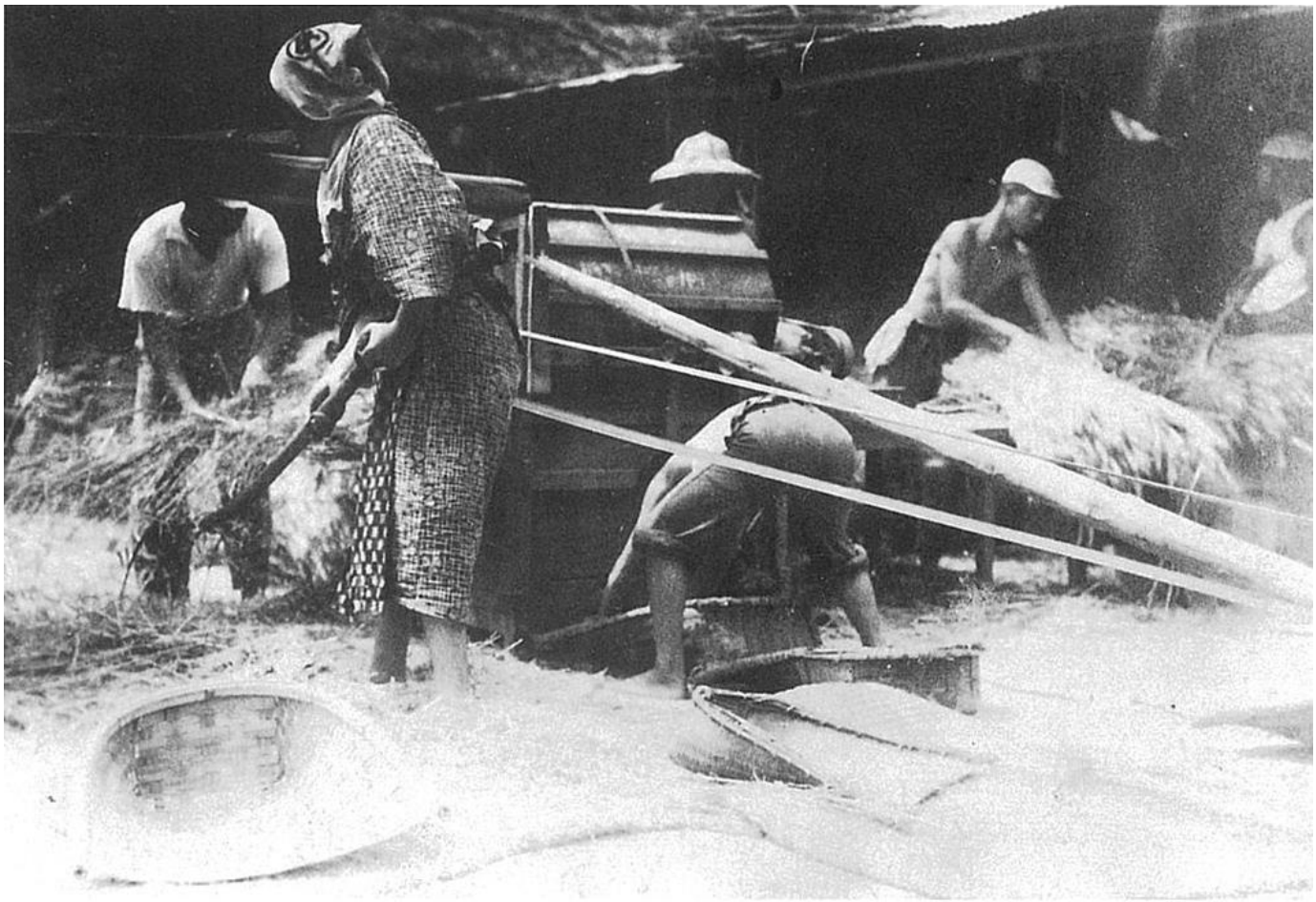
　田んぼで干された稲は、自宅の庭へ運んでから脱穀された。昭和31年11月。

脱穀(稲こき)

　足踏式脱穀機は大正の末年から普及しはじめた。それまでは「千把こき」によって行われていた。

　昭和初期。

千把こき（昭和53年11月）



動力利用による脱穀作業

　脱穀に動力が利用されるようになったのは戦争中からである。昭和19年。

籾の乾燥

　脱穀された籾は5升ぐらいずつ筵に広げ、2〜3日ほど日に干して乾かす。昭和30年ごろ。

唐箕(とう　み)

　干された籾は籾すりといって唐臼で玄米と籾がらとに分け、これを唐箕にかけて籾がらを吹き飛ばし、玄米と分離する。昭和32年。

全自動籾すり機

　写真中央は万石といって、唐箕にかけた玄米を良い物とシイナやダケなどと選別するものであり、終わったものを俵づめにしている。昭和27年。

スズメボッチ

　脱穀の終わった稲藁は、スズメボッチといって、小さな藁束を6把くらいずつ束ねて立てて乾燥させる。その利用範囲は縄や俵などと広い。昭和25年ごろ。栗原大塚。

田んぼが終わった後の田の風景

藁が積んであるのをイナムラボッチといい、藁を乾燥させるためのものである。左側は脱穀の後であろうか。乾田で田んぼがまとまっている家などでは「野ごき」といって田んぼで脱穀した。

昭和25年ごろ。座間上宿。

俵編み

　1俵は4斗(60kg)、正式に販売したり、小作米として納入するには米の品質ばかりでなく、俵も検査に合格したものでなくてはならなかった。　昭和12年。

麦作

　幕末から明治初期にかけて市の北東部一帯の芝原が開墾かれ、畑地面積が増えた。写真は栗原小池西側から大山を望んだ所で、畑には麦が播かれている。

　昭和32年。

麦播きに行く芝原百姓

　親子で芝原の畑へ麦播きに行くところで、場所は広野台1丁目の相武台団地入口付近。リヤカーに乗せてある俵は肥俵といって肥料が入っている。昭和30年ごろ。

麦播き

　妻が麦播きの機械を使って種を播き、夫がその上に堆肥を落してゆく。　昭和30年ごろ。栗原東原。

牛による麦の中耕

　中耕とは発育を助長するために生育の途中で表土を浅く耕すことで、成長までに2、3度行う。
　昭和34年。現在の日産工場敷地内。

刈り取り前の麦畑

　木陰で午後のひとやすみ。麦は良く実り、丘の上まで続いている。　昭和37年6月。入谷羽根沢。

刈り取り

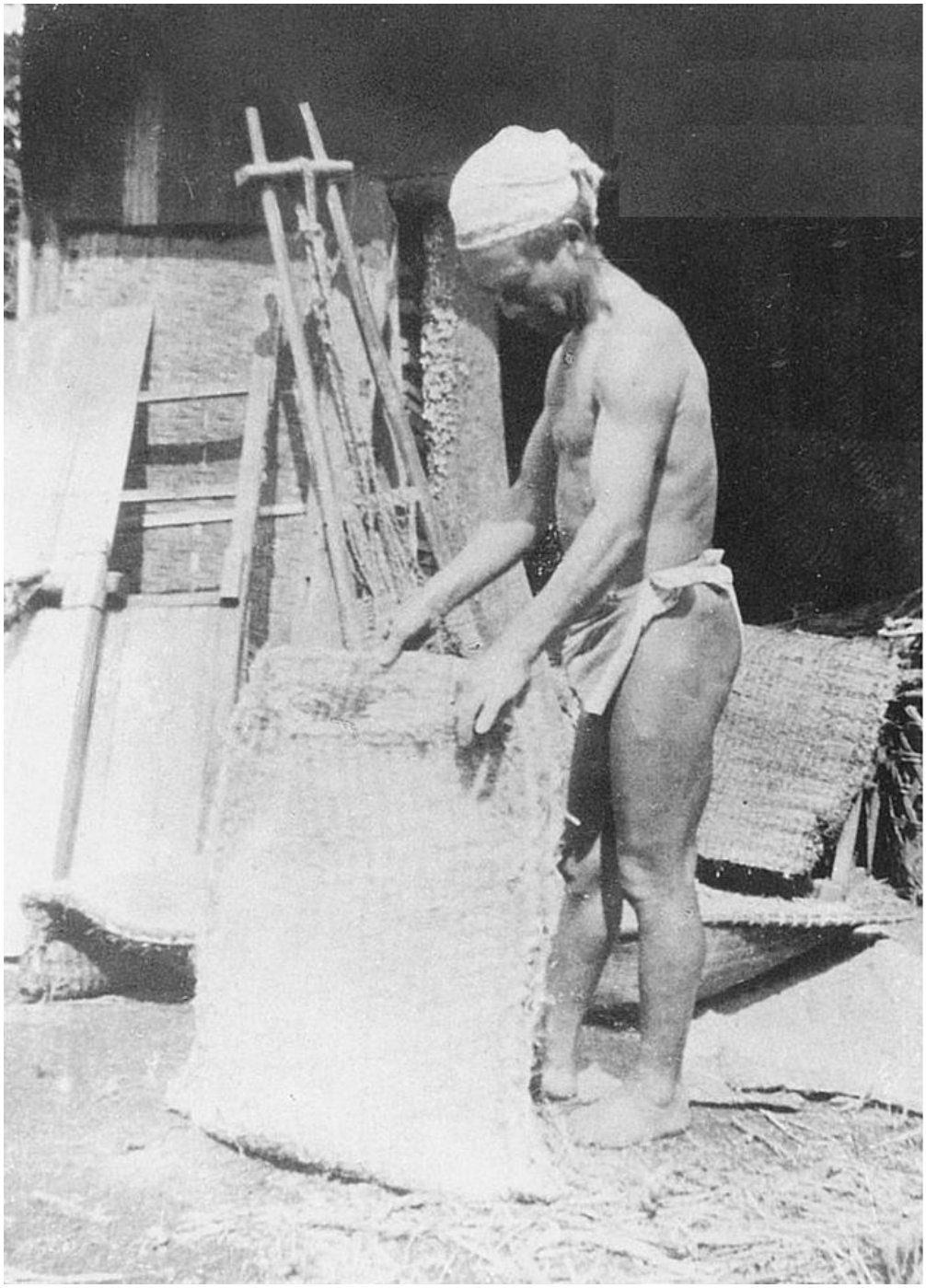
6月中旬より下旬にかけて刈り取り、脱穀、調整をするが、この時期は、春蚕、田植えなどと重なり農家にとっては大変忙しい時期であった。写真は昭和45年ごろの相模が丘で、周囲はすでに宅地化されている。

麦の脱穀と風選

手動の扇風機で風を起こし、脱穀の終わったものから藁かすを吹き飛ばして選別する。昭和5〜6年ごろ、大塚。

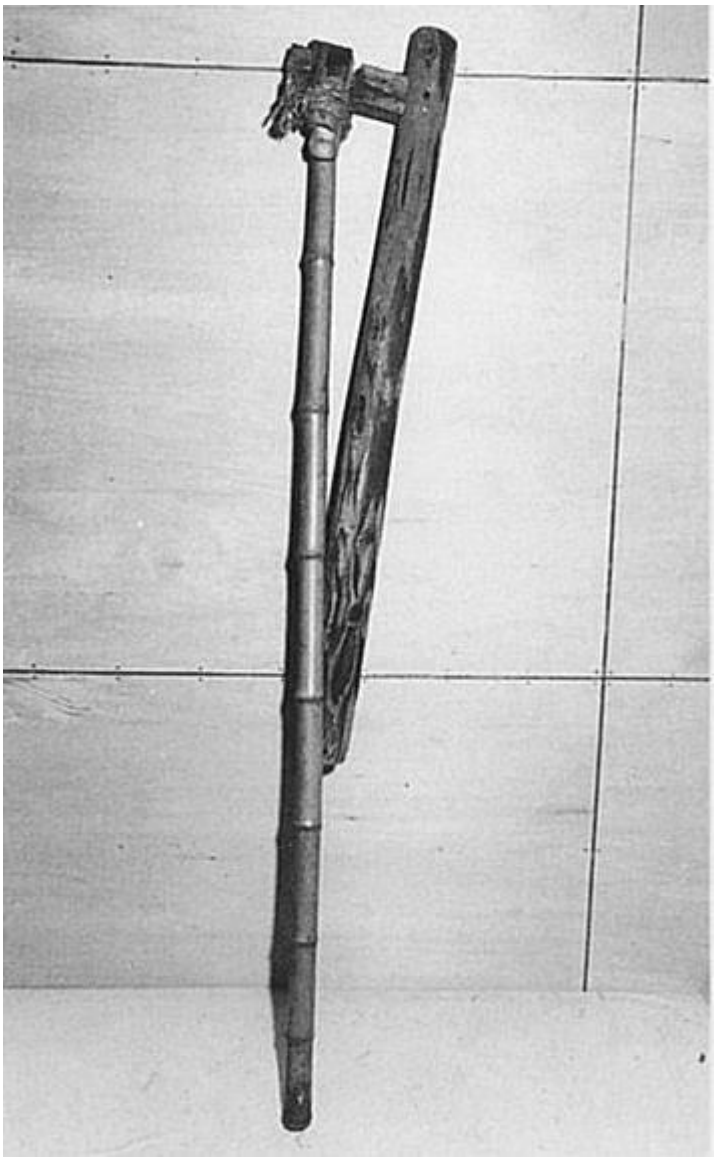
共同作業による麦の脱穀

　麦も脱穀機ができる前までは、千把扱きによって脱穀した。そしてその後ボーチ、ノゲブチなどといってクルリ棒で穂から離れないものやノゲ＝ノギ(芒)をたたき落した。　昭和30年。



調整

麦の調整は暑い時期であり、汗で埃が付着するので裸になって作業をするのは普通のことであった。



クルリ棒

　刈り取った麦や大豆を叩いて、芒（のぎ）や粒を落としたり、脱穀を行うための道具。

　「唐竿」とも呼ばれており、握り手となる「柄」、回転して稲や麦を打つ「打部」、柄と打部を繋ぐ「連結部」という3つの部品からできている。

畑の作物
士官学校移転前の天神原の畑

　畑の作物としては、桑や茶、麦類のほかにサツマ芋、里芋などの芋類、大小豆、油菜、大根、陸稲などがあった。

　写真の天神原は入谷や座間の人々にとって近くて土質の良い最高の畑だった。昭和11年。

サツマ芋

　サツマ芋は、明治の中ごろから多く栽培されるようになり、農家にとっては米・麦に次ぐ重要な作物であった。また、用途が広く昭和に入ってはますます増加し、農家の現金収入の大切な作物となった。

　写真は農家の庭に山積みされた白千貫という澱粉原料用の品種で、戦後30年代は澱粉用の全盛時代であった。　昭和31年。

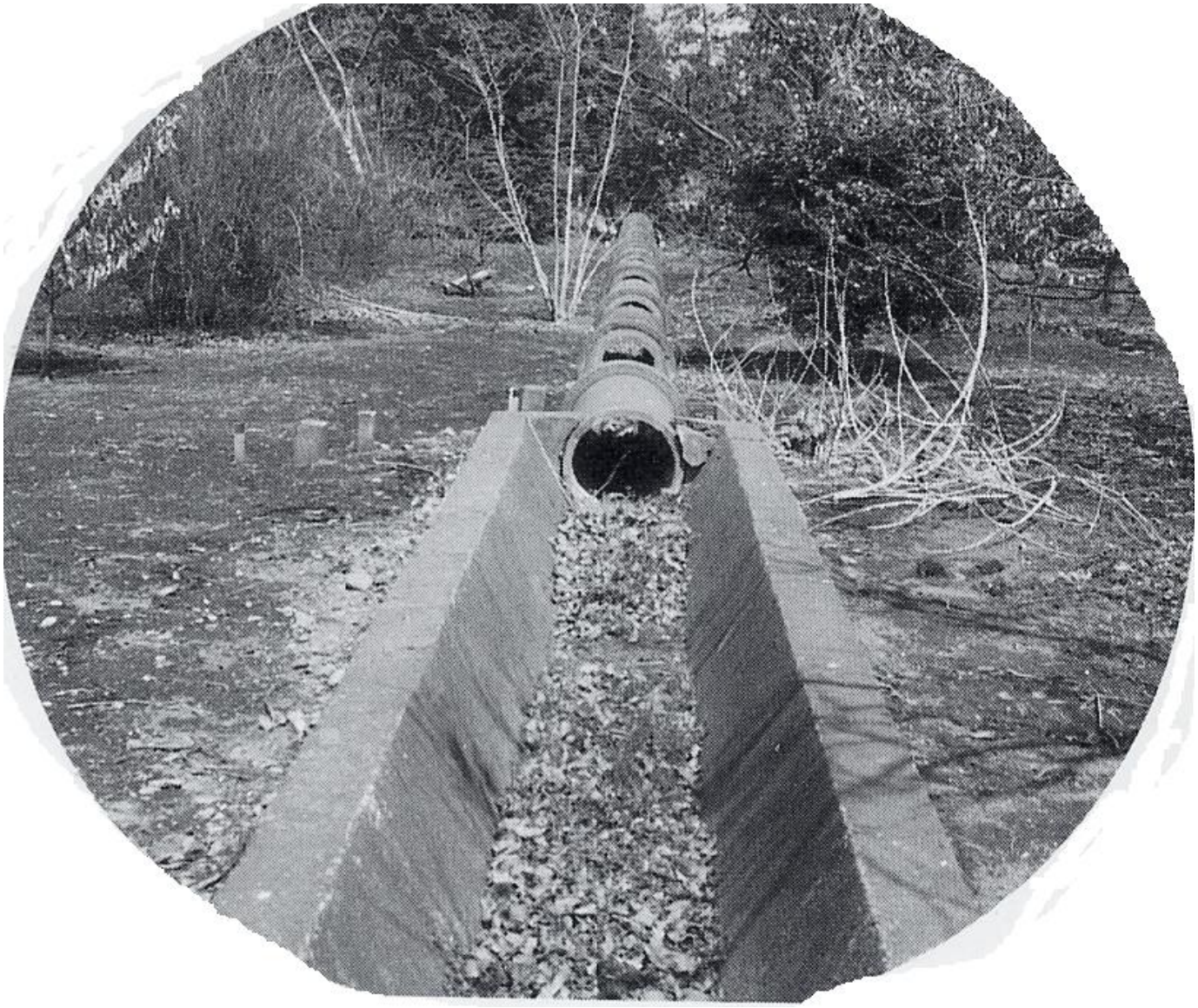
食料用サツマ芋の出荷(昭和19年)

ミツバ

切りミツバの根を束ねモロ=ムロ (外気に触れないような構造の室) に入れる。昭和35年。

箒モロコシ(昭和34年)

ゴマの収穫(昭和14年)



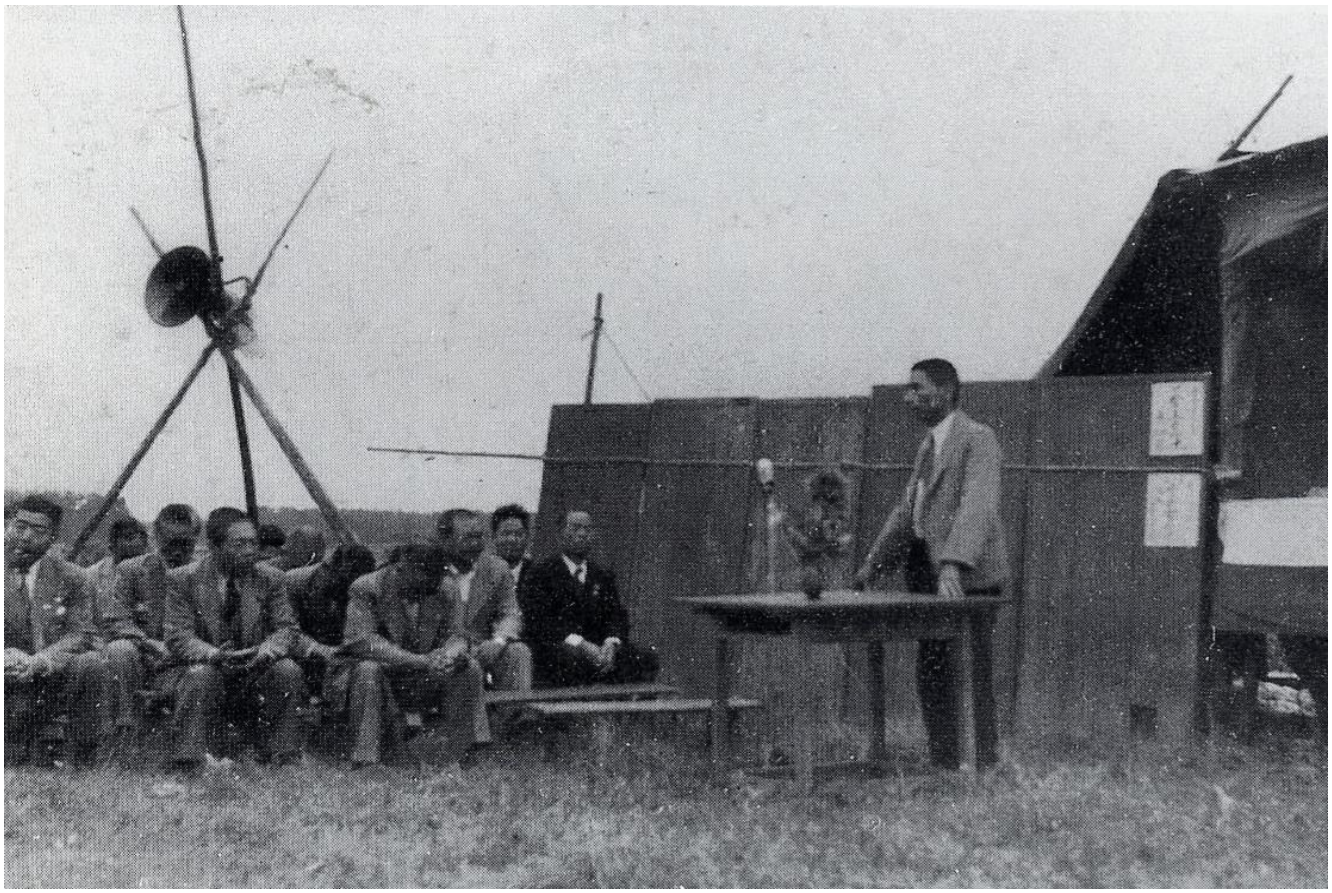
畑地灌漑事業

戦後、食糧事情が大変逼迫した時期、食糧の増産は国の重要な施策であった。このような状況下、相模川の水を利用して相模野台地上を潤すという計画が昭和24年3月実施されることになった。

これが相模原畑地灌漑事業である。写真は水路跡。

東原に残る畑地灌漑用水路跡

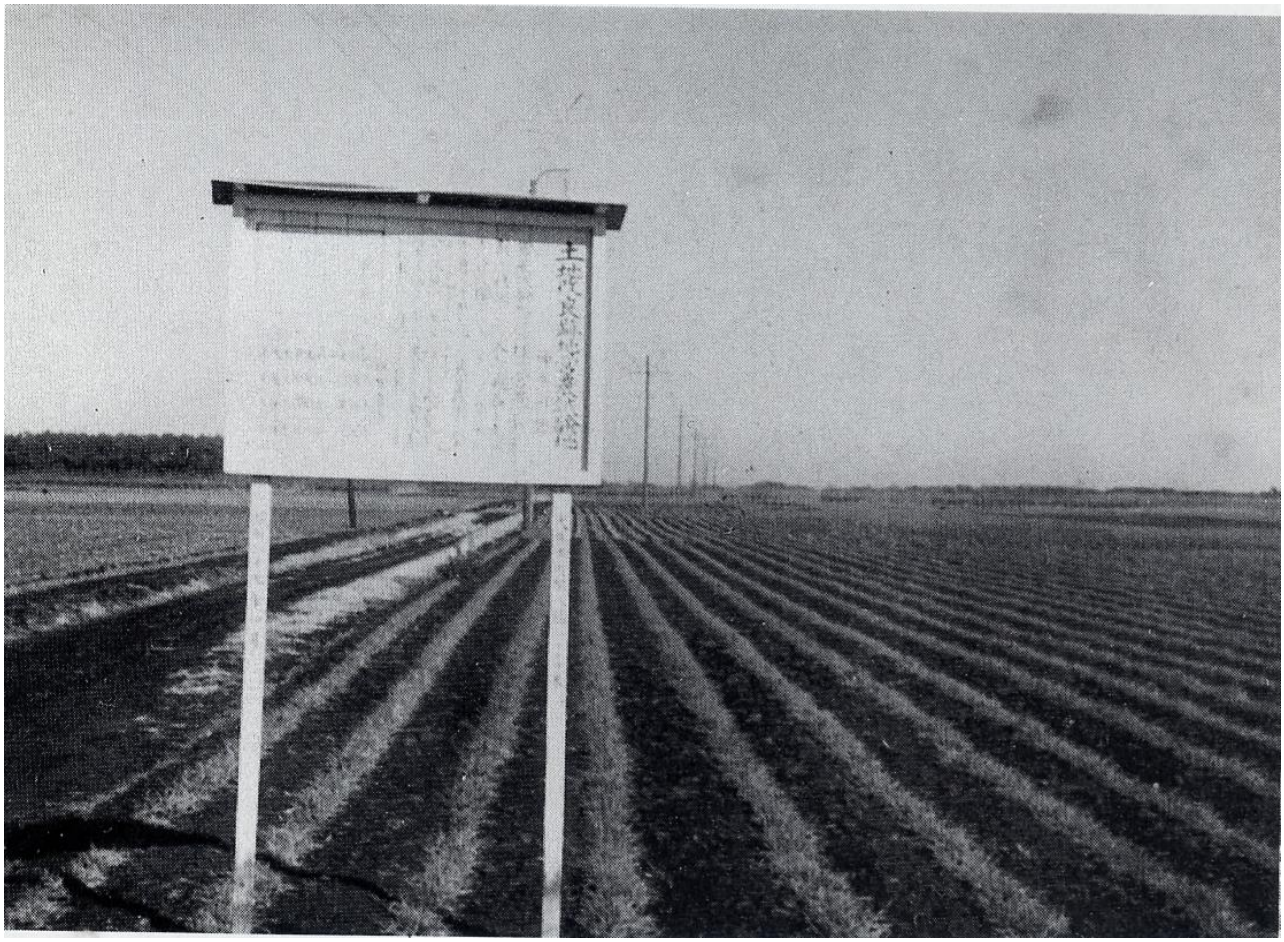
（昭和58年2月）



記念式典

　最初の収穫を祝って昭和29年10月記念式典が行われた。

灌漑祭りも行われた。

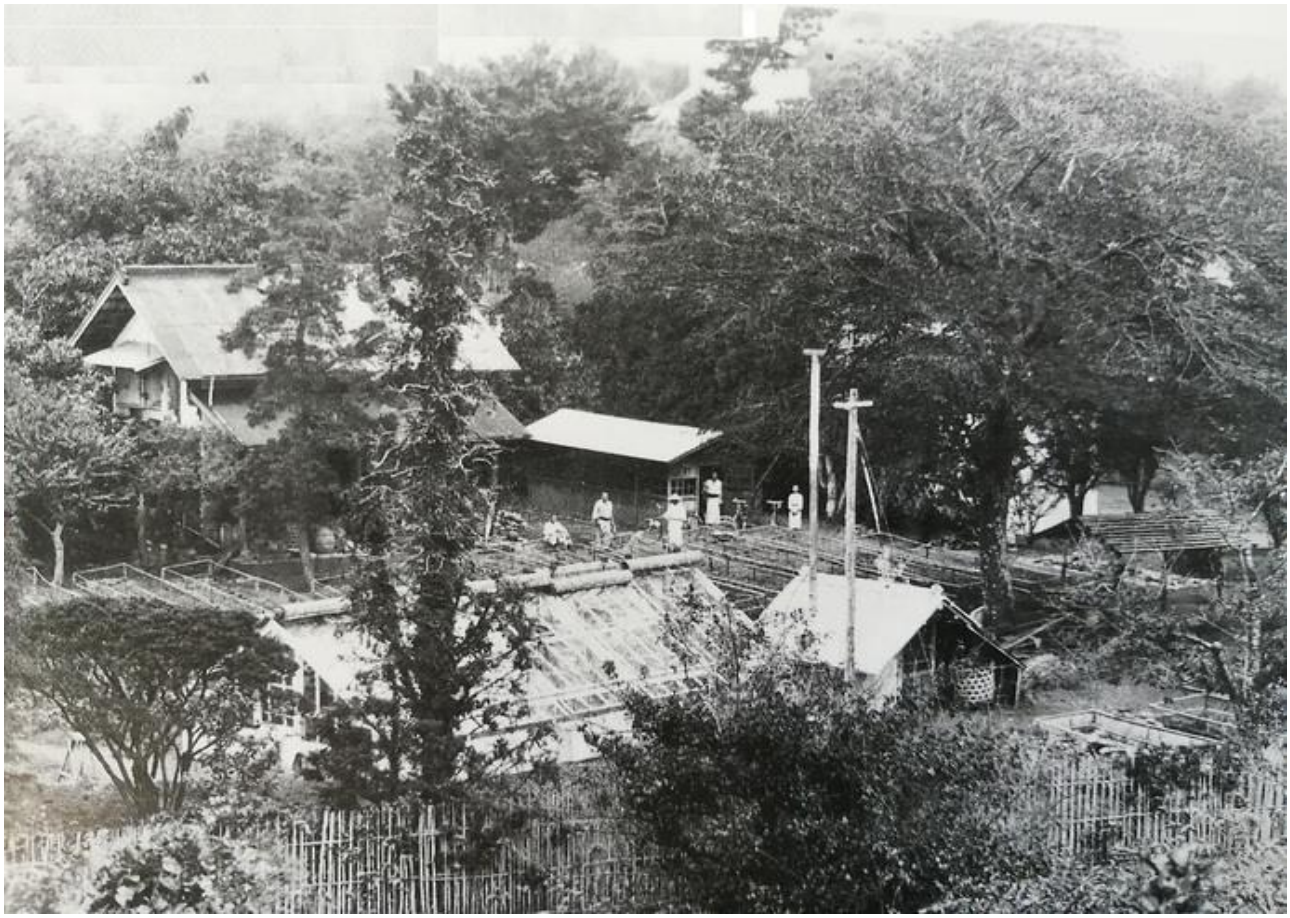


現在の東原小学校北側にあった県指導の営農試験地。
　昭和30年ごろ。

よく実った陸稲の中で満足げな農民。
　昭和30年ごろ。

温室

　大正12年、栗原の大矢弥市氏が温室を建てメロンの栽培を始めた。出荷先は銀座の千疋屋。
「翠香園」の表札があざやかに見える。



翠香園の全景

温室が建てられたその年の9月1日関東大震災が発生、温室は破壊されてしまった.

ビニールハウス

　ビニールハウス栽培は昭和39年ごろ導入され、イチゴ、トマトなどの栽培にと農家の間に広まった。

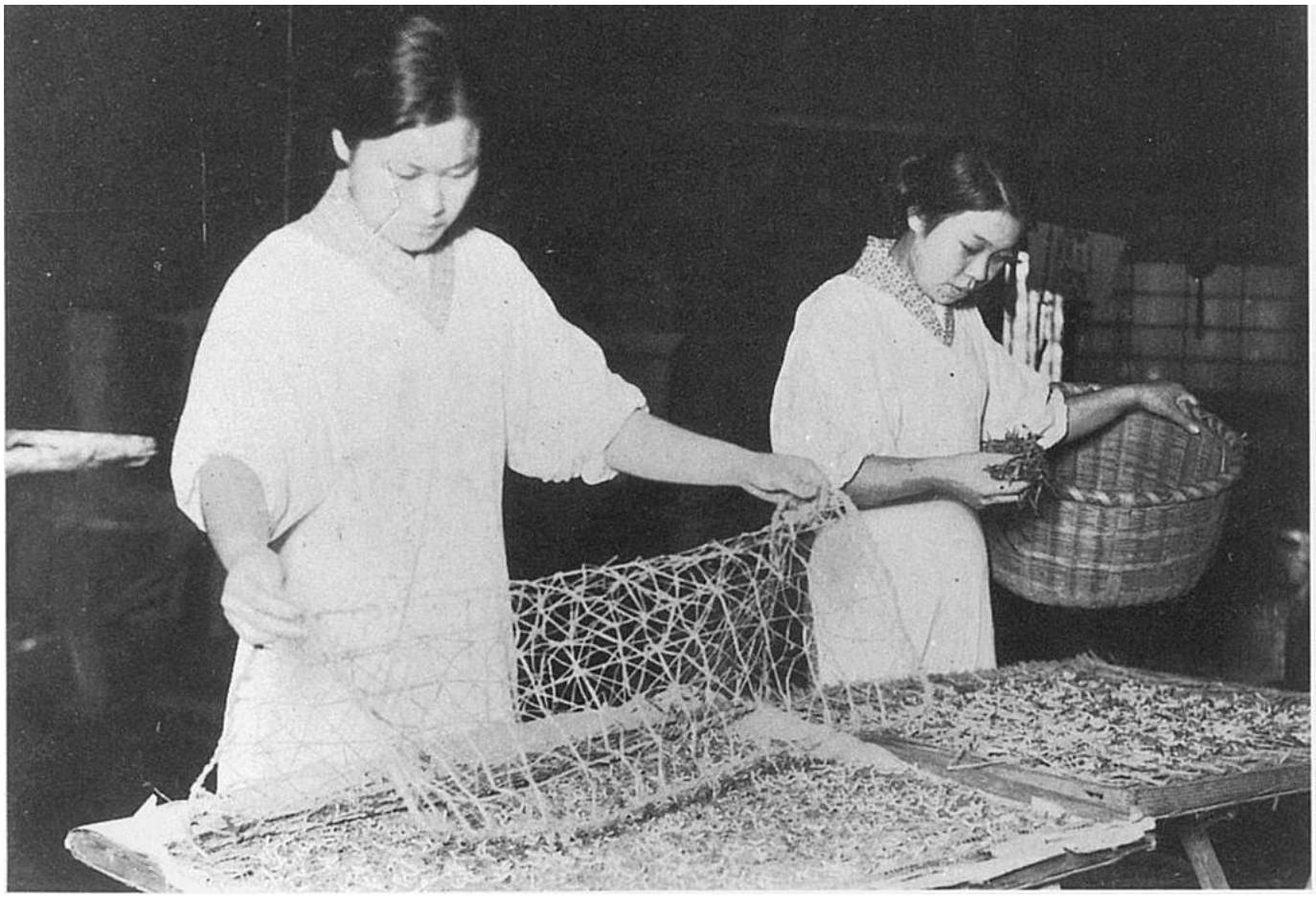
養蚕　桑畑

　養蚕は江戸時代から、昭和初期にかけて、農家にとって唯一の現金収入の源泉であった。特に横浜開港に伴い輸出品として、市内の多くの農家で盛んに養蚕を営むようになった。

　そのため、市東部の相模野台地上には写真のような光景が多く見られた。

桑取り

稚蚕用の桑取りをする座間下宿の養蚕組合の人々。
昭和27年。



給桑

　稚蚕のうちは桑をきざんで与える。
写真は女子青年会の講習会のスナップ。
　昭和10年ごろか。

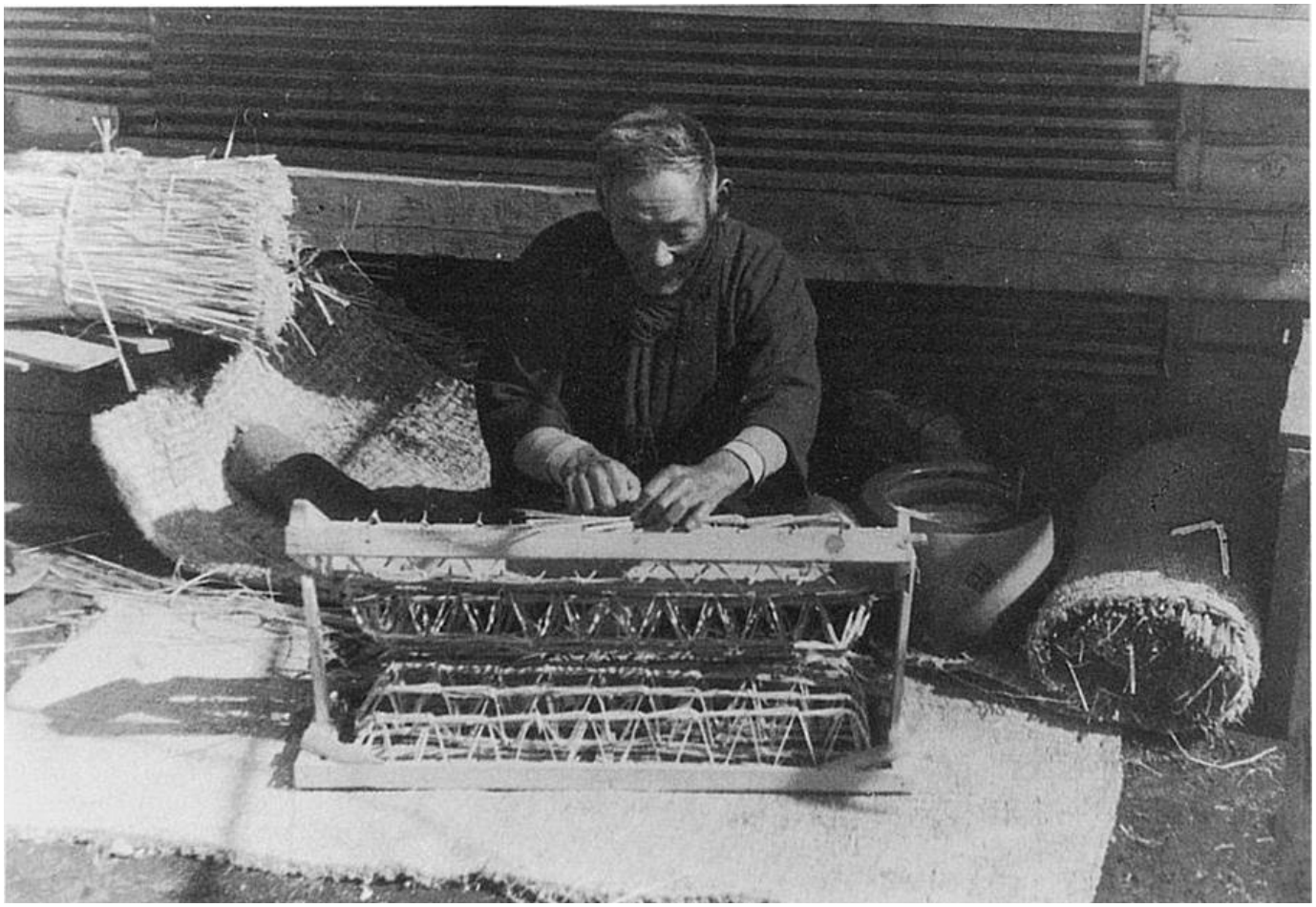
條桑育

　この飼育法は昭和初年になって普及してきたもので、桑を枝のまま蚕に与えるやり方である。

　昭和6年、下栗原にて。

棚飼い

棚を作ってこれにエビラを乗せて飼育する方法で、
狭い場所で比較的大量に飼育できた。



まぶし作り

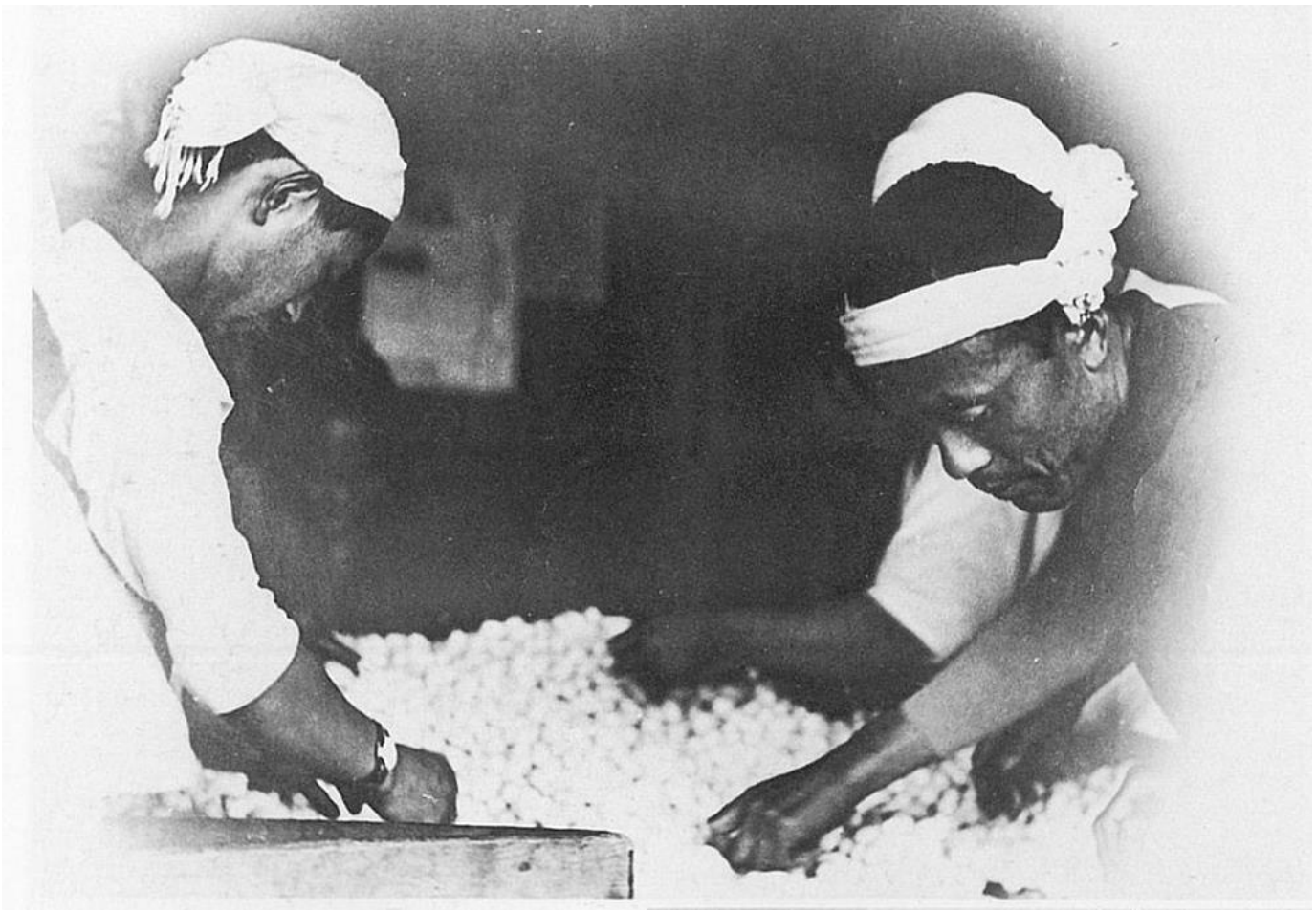
　蚕が十分発育すると体が透き通ってくる。これを上蔟といい、蚕をまぶしに移して繭を造らせる。

　写真は火鉢をかたわらに、日なたでまぶしを作る老人。昭和30年ごろ。

繭かき

　上蔟から数日おき、蚕が完全にサナギになったところを見計らって繭を取る。これを繭かきという。

　写真は出征した息子へ送る写真で少し改まっている。　昭和13年、下栗原。



繭の選別

収穫された繭は厳しく選別されてから出荷される。
昭和10年。

養蚕用煉炭を作るための講習会

　棚飼いが普及すると天井裏で飼うことができず、気温の低い期間は暖房が必要となった。これを温房飼育などと呼んだが、初めは木炭を用い、大正の中ごろから薪を蒸し焼にする方法が行われるようになった。

　写真は下栗原養蚕組合。昭和15年。

蚕種製造

　養蚕は蚕種を蚕種商から買って、これを孵化させて行うが、この蚕種は初め長野、群馬、栃木などの業者から買われていたが、明治末から大正時代にかけ市内にも上宿に大盛館、中宿に精業館、新田宿に香川などの大きな蚕種製造業者ができ、県下に名を知られた。

　写真は座間中宿の精業館。

　最盛時における蚕種製造高は前の写真の精業館が県下第一位、この写真は大盛館で第二位であったという。

蚕種同業組合員

蚕業視察調査旅行の記念写真。
大正期のものと思われる。

雌雄鑑別

　種屋では蚕を交配するために、繭になる前の蚕を雌と雄とに分ける大切な作業があった。これを雌雄鑑別といい、初め長野県から専門の鑑別者として、若い女性が大勢やってきた。

　全員が女学生と同じようなお揃いの服装で、種屋やその分場となっている農家を順次鑑別して歩いた。

　大正7年ごろ。精業館。

種紙

　蚕卵紙とも呼び、右が平付といい初期のもの。その後、蚕病予防法が制定されると、検査がしやすいように金枠を種紙の上に置いて、産卵させるようになり、このような枠製のものとなった。

蚕種製造所内部

場所は精業館、製造所の内部の様子がよくわかる。
大正10年ごろ。

製糸講習会

　明治から大正にかけて、農業を生業としていた座間の人々にとって養蚕は大切な収入源であった。このため、常に新しい技術の導入をはかり、製糸講習会などが盛んに行われた。明治44年。

星徳製糸講習会
入谷地区での講習会の記念。大正7、8年ごろ。

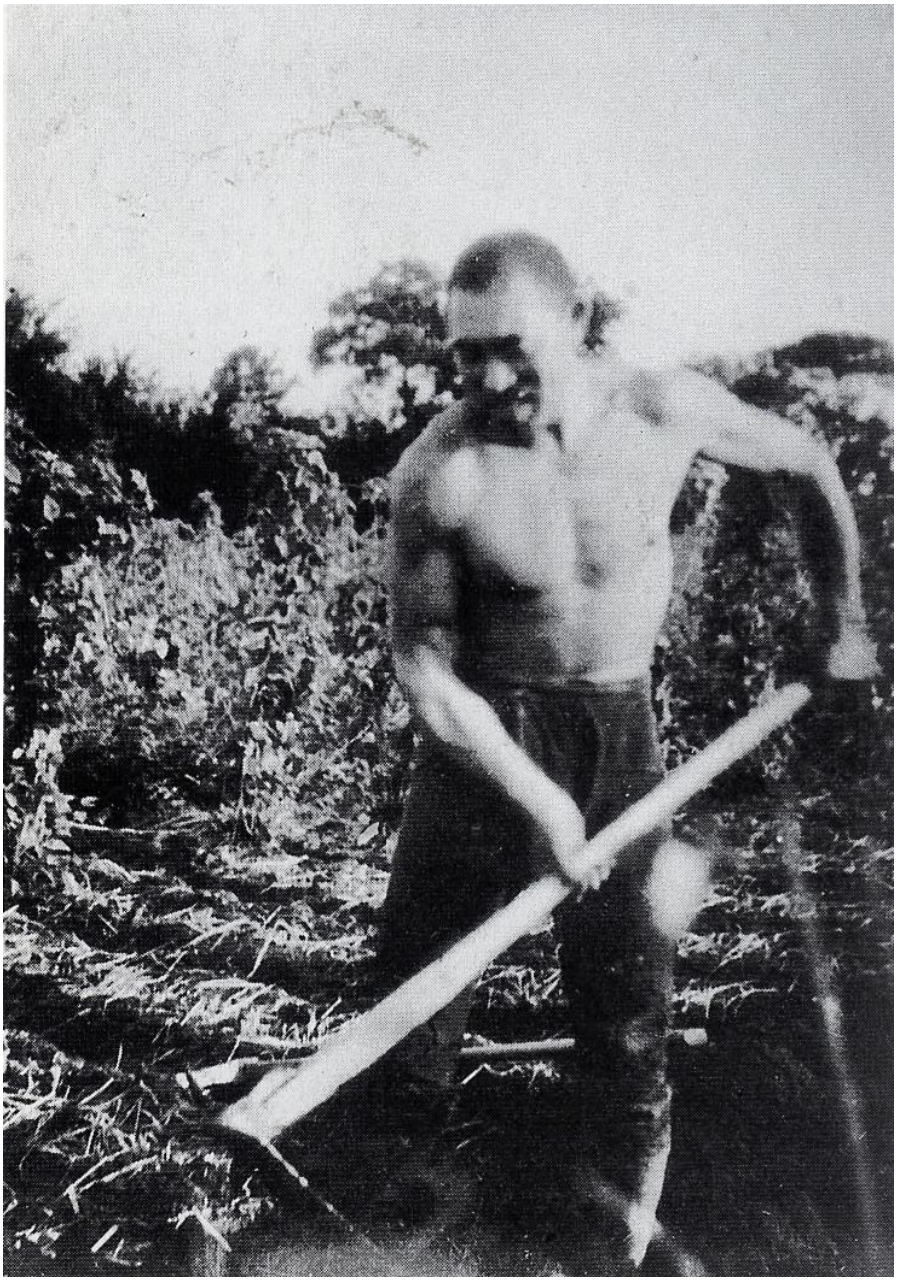
糸取り

　大正の終わりごろか。機が一部しか見えないが、踏取り式であろう。

糸取りの実演(昭和56年)

野良着姿
一日の作業を終えて

　入梅時であろう。農夫の背には雨よけのゴザがかかっている。



半裸で畑を耕す農夫。たくましさがにじみでている。

入梅時、田へ仕事に行くところか、
モモヒキの裾は藁で結わえている。

自宅裏の畑をさくる若い農夫。

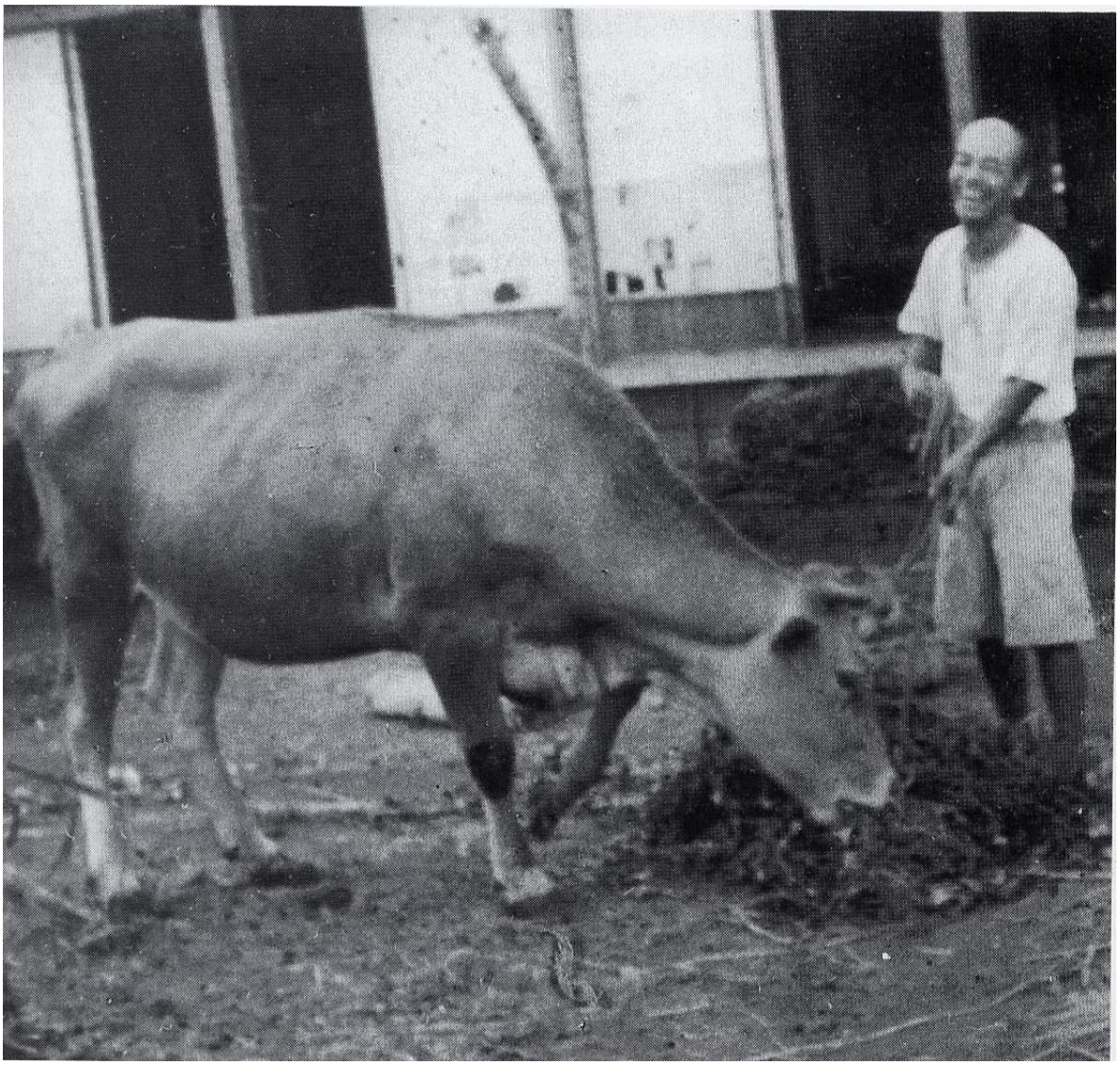
クワを肩に野良へでかける老婦。

昭和30年代まで皆このようだった。

農家と家畜　ヤギ

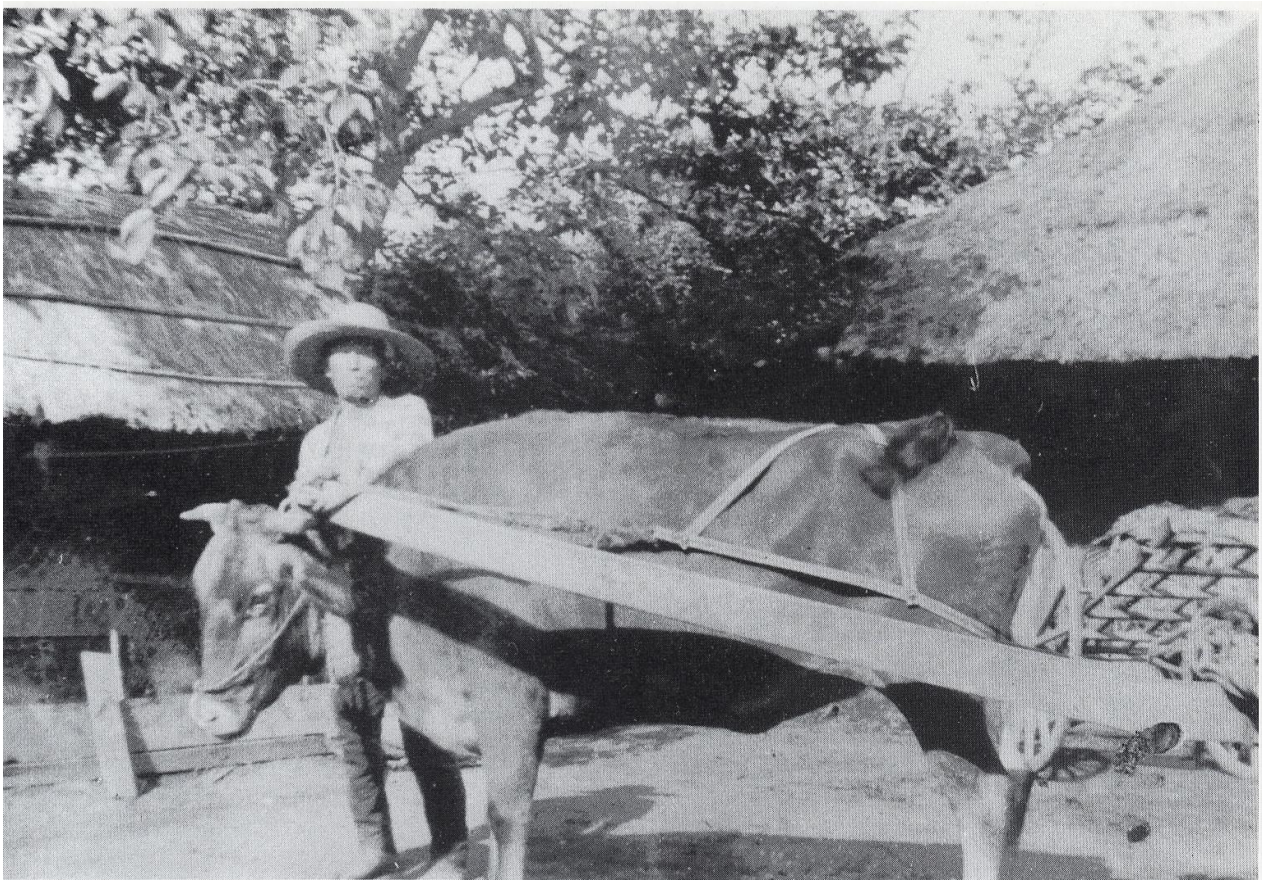
　農家にはさまざまな目的で、いろいろな家畜が飼われていたが、最近ではほとんど見られない。

ニワトリ



ウシ

ヒツジ



耕運手段
牛車

　座間において昔から使役用としては馬が使われていたが、大正時代から朝鮮牛が入ってきて、農耕に運搬にと利用されるようになり、農民にとって能率の飛躍的な増進となった。昭和30年ごろ。

リヤカー

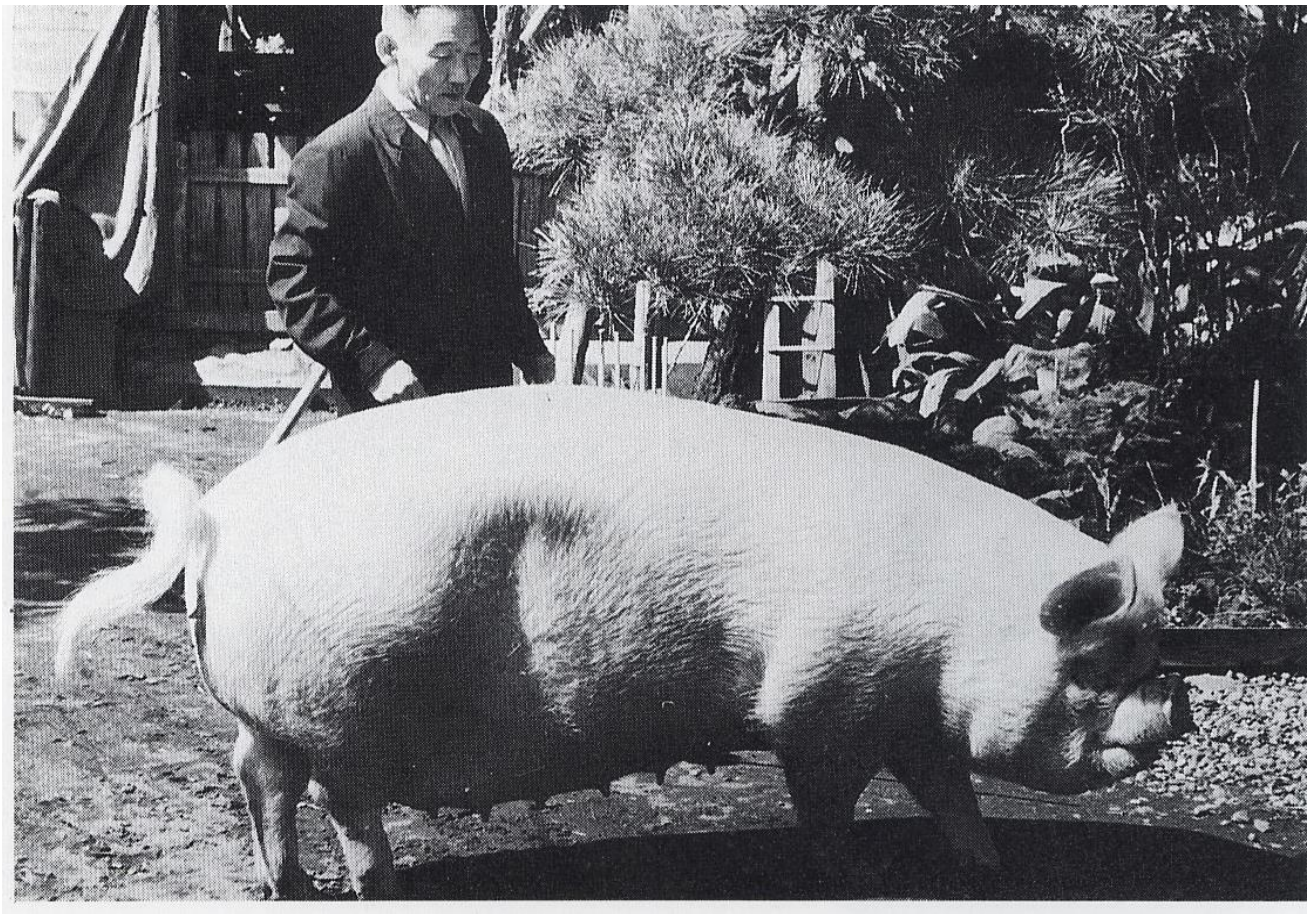
　手車の代用として登場したのがこのリヤカーで、砂利道などでは弾力があるので引きよく、近い距離を運ぶには大変便利であった。

耕運機

　昭和30年ごろになると動力耕運機の導入が始まった。農民にとって農業の機械による農作業の省力化の幕明けであったが、値段が非常に高く「畑2反売ってもまだ足らなかった」そうだ。

畜産　畜産品評会

　昭和36年、座間駅前にあった野球場で行われたときのスナップ。品評会は戦前から盛んに行われた。



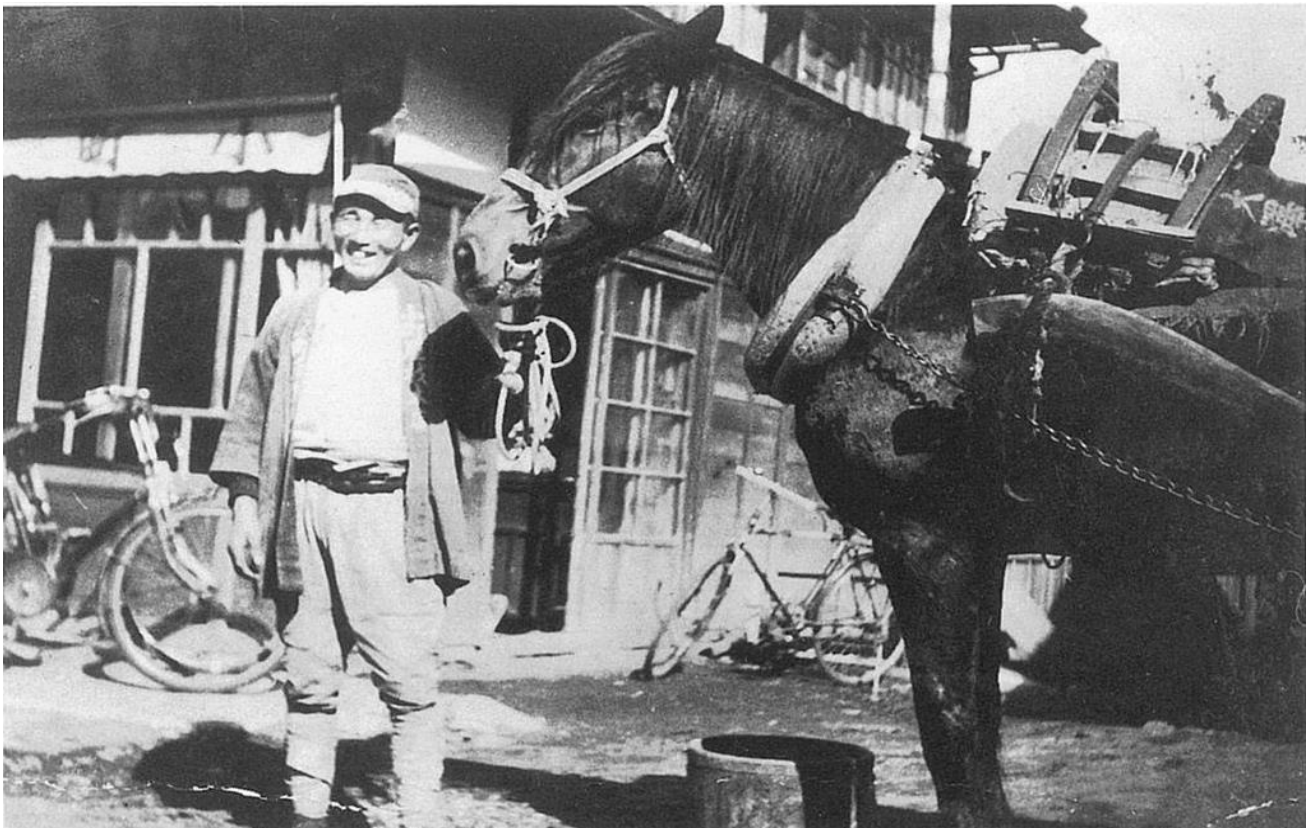
養豚

「高座豚」の名前があるように、この地方の養豚の歴史は古い。座間でも大正初期から種豚を中心に盛んに飼育され、現在に至っている。

昭和35年、第4回全国種豚共進会で入谷の斎藤氏出品の豚が優等となり、高松宮杯を受賞した。

乳牛

座間の酪農は大正末に始まった。当時は、自宅で育成、種付けして、分娩前に横浜の搾乳業者に貸し出して代金をもらうという仕組みだった。乳牛は当時大変な財産であり、写真のように母屋で大切に飼われていた。昭和初期。



他の生業
馬力

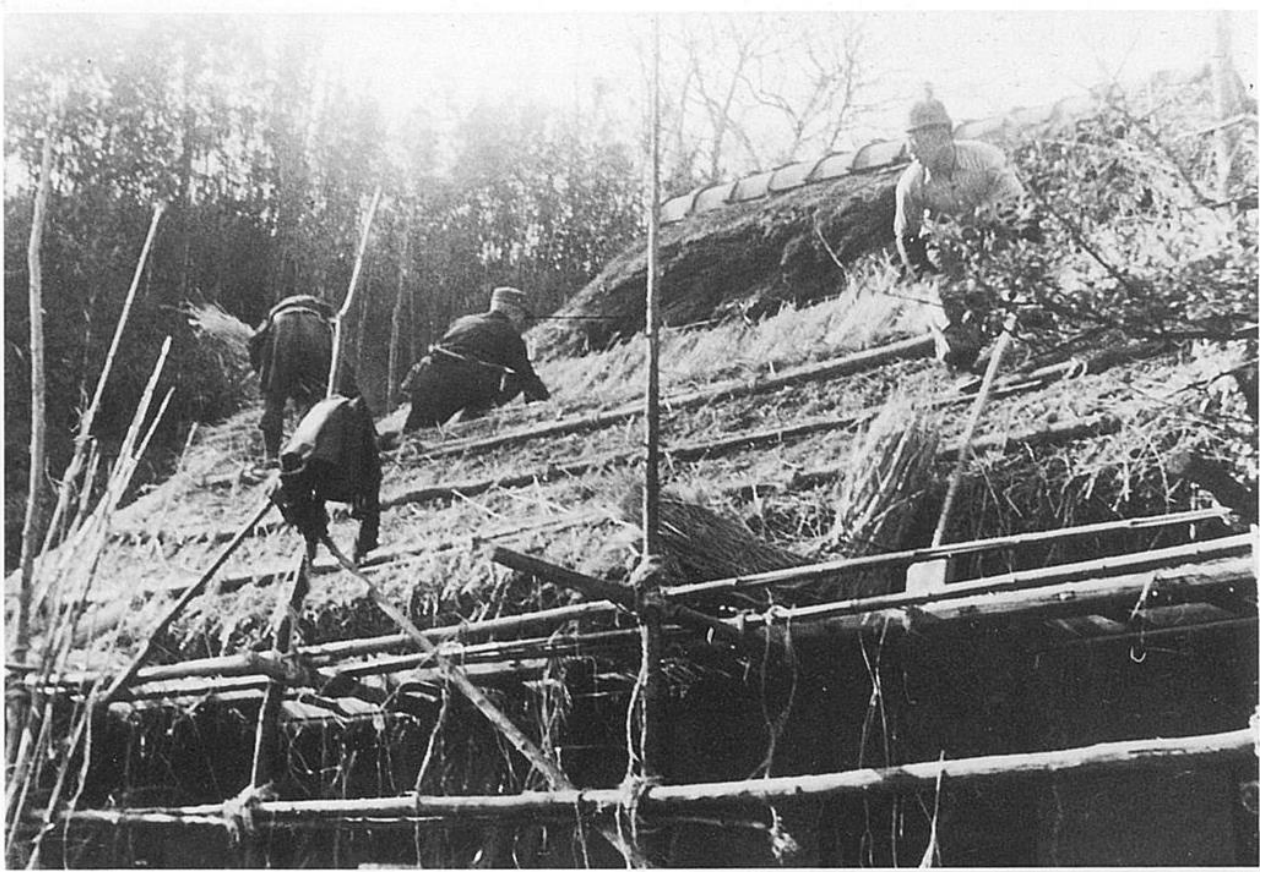
資料によると、明治9年市内には133頭の馬がいた。おそらく農耕や輸送にと使われていたのであろう。
いつ荷馬車が入ったのか明らかではないが、明治26年には20台の荷馬車があり活躍していた。写真は大塚の材木屋の前、鞍の大沢の文字は栗原芹沢に住む鞍作りの方の名前。昭和初期。

製炭

　市内の栗原地区などには平山があって、クヌギ、ナラなどの製炭材料の雑木が多く植えられ、炭焼きが行われていた。写真は製炭の検査の時のスナップ。昭和15年。

植木栽培

　昭和30年代半ばから始まる高度成長期の建設ブームに伴い、植木生産が注目され、座間でもいち早く導入されて盛んに栽培された。写真は小松原地区での苗木の出荷風景。昭和40年過ぎごろ。

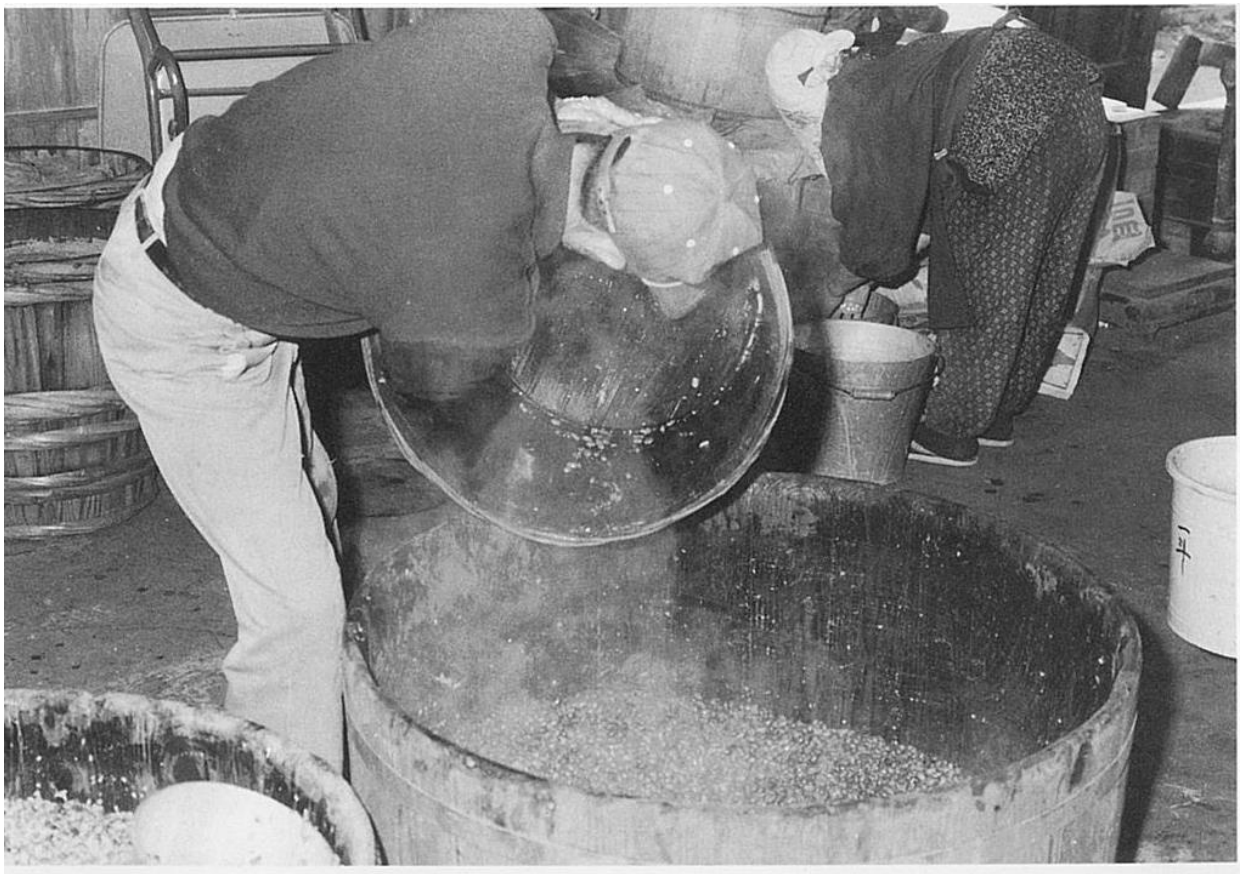


屋根ふき

　昭和30年代までは草葺きの家が大半で、このような光景はあちこちで見られた。作業は屋根葺職人の指導によって進められる。

しょう油づくり

　毎年、定期的にしょう油しぼりの職人がやってきて、一年分のしょう油を作っていった。



こうじ屋

　昔は、農家ではみそ、しょう油ともにほとんど自家で作っており、そのためのこうじをつくるこうじ屋が何軒かあった。

農地改革　農地祭

戦後の日本農業の出発点となった農地改革の終了を記念して、昭和23年4月、座間小学校運動場で農地祭が行われた。写真は改革に当たった農地委員の人々。

座間農業会の解散

昭和18年、戦争が拡大長期化する中で、農村における経済活動を取りしきるために農業会が誕生、戦後も食糧供出、物資配給等に活躍。昭和23年農業協同組合の誕生によって業務を終了した。写真は解散時の農業会役職員。

土地改良事業

　農業経営の合理化のため、土地の有効利用を目的として、区画整理などが行われた。写真は昭和36年に竣工された相武台前地区の土地改良事業の記念。

人々の経済生活編

完